

Beyond Borders : 英語を手に、境界線のその先へ踏み出す

認定NPO法人

日本紛争予防センター理事長 瀬谷ルミ子



英語は、コミュニケーションのための「道具」だ。より高い目標を目指すほど、よく磨きあげられた道具が必要になる。腕の良い職人が一流の道具を使い、日々丁寧に手入れをするように。同時に、使い手が道具を何のために使うのかという「目的」を持ち、自らの能力や専門性を高め、腕を磨くことがまず必要だ。

世界は急速に変わりつつあるとよく言われる。世界で生き抜くために日本も国際化が必要で、そのためにグローバルな人材を育成することが求められている、とも。

グローバル化のためには英語という道具が不可欠なのは確かだ。しかし、英語だけでグローバル化が進むわけではない。そもそもグローバルな人材ってなんだろう？

私は、「ボーダレスに活躍する力」を持つのが、グローバルに活躍する人材だと考えている。ここでいう「ボーダレス」で越える「ボーダー（境界線）」は、二つの意味がある。

一つ目は、国を分ける「国境」を越え、世界の多様な文化、民族、社会性のなかで自らの居場所を見つけ、柔軟に立ち振る舞うことだ。2014年現在世界第三位の経済力をもつ日本は、ある予測では、2050年の世界では第8位になっているという。日本のひとつ前の第7位がインドネシアで、日本とほぼ横並びの第11位はアフリカのナイジェリアだ。いま日本にとって途上国とされている国々や遠い存在のアフリカ諸国が、日本と横並びの水準に発展するくらいに、すでに世界は急速に動いているのだ。日本国内で自分に何ができるのか悩んでいる人もいるが、これら多くの国々で、日本で当たり前前の技術や職業が新たに必要とされ、日本の外に出るだけで貴重な専門家として重宝されることもあるのだ。

二つ目は、業界や分野、組織の間にある「垣根」を越え、現場のニーズに対して成果を出すことだ。私は紛争解決に役立つことがしくて、20歳のときにアフリカのルワンダを単身訪れた。そして、自分が現地では「日本人」の「大学生」である肩書以外に何も持たないこと、役立つには所属や肩書に関係なく、身一つで現場の問題を解決するスキルが必要だと痛感したのだった。その悔しさから、紛争解決という専門を手

●プロフィール：群馬県生まれ。中央大学総合政策学部卒、英ブラッドフォード大学紛争解決学修士号取得。国連PKO、外務省、NGO職員として、ルワンダ、アフガニスタン、シエラレオネ、コートジボワールなどで勤務。2007年に日本紛争予防センター事務局長に就任後、ソマリア、南スーダン、ケニア、スリランカ等の現地事業を統括。2013年7月より現職。ニューズウィーク日本版「世界が尊敬する日本人25人」、日経ビジネス「未来を創る100人」等に選出。2013エイボン女性年度賞大賞受賞。著書は「職業は武装解除」（朝日新聞出版）。

に、国連、外務省、NGOなど組織を問わず経験を積み、成果を出すことを20代から目指した。そのお陰で、今では組織ごとの違いを踏まえたうえで、協力しあって現場の問題を解決できるようになったと思っている。

ボーダレスに活躍するために必要なのは、自らの腕を役立てる場を求める意志、英語という道具、そして最初の一步を踏み出す行動力だけだ。

そのうえで、自分がある段階まで導いてくれる人の存在もとても重要だ。私が人生で影響を受けた人は多いが、最初の存在は高校の英語担当のY先生だった。英語がもともと得意だった私だが、高校生になると留学経験者や帰国子女など、自分以上に英語を身につけた人たちがいることを知り、日本で勉強するしかない自分が授業から学べることは限られているとあきらめ気味になった。そのような時に、通常の授業や参考書では扱わないような私の数々の疑問や質問を、時には何週間もかけて調べて必ず答えてくれたのがY先生だった。数十年経った今でも、その内容や答えを覚えていて、現場で英語を使用する時にふと思い出すこともある。

私がY先生に信頼を寄せ、さらに英語を頑張って勉強するようになった理由が、今ではよくわかる。先生は、「教員」としての最低限の役割をこなすためではなく、英語という専門性を持つ一人の人間としてのこだわりや熱意を持って、生徒に向き合ってくれていた。高校生だった私が、肩書に関係なく目の前のニーズに応えてくれた先生に影響を受けたように、自分も紛争の現場で接する人々に対して、同じ存在でありたいと思っている。